

[特集：国際フィールドワーク]

アメリカへの国際フィールドワークの実践と その課題

The Implementation of the International Fieldwork to the United States
and Its Complications

塚本 鋭司

TSUKAMOTO Satoshi

愛知大学コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: satsukam@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

This paper discusses how I made a plan about the international fieldwork to the United States. In particular, I focus on the link between what students learn before visiting some places in the U.S. and what they actually see and experience during the fieldwork. It is extremely important to coordinate and decide the sites students visit in the U.S. well in advance. In addition, I explain about how the students react in a variety of situations in the U.S. and what they can learn in these situations. Finally, I reflect upon my experiences as a coordinator of the international fieldwork to the United States.

この論文ではアメリカへの国際フィールドワークの授業の計画を立てるときの留意点、実際に引率して感じたことや大変だったこと、そしてアメリカで学生が見聞したことを英語でまとめる作業について、記述したいと思う。

私が初めてアメリカへの国際フィールドワークを実施したのは、2007年2月16日から3月1日である。そのフィールドワークを行う前に、国際フィールドワークⅠ（アメリ

か)という授業を開講した。この授業では、実際に訪問する場所に関連することを学習した方がよいと思ったので、そのように授業を構成した。たとえばアメリカのテレビ局と新聞社を訪問する予定だったので、アメリカのメディアについての記事、ダグラス・ケルナー (Douglas Kellner) が書いた *Cultural Studies, Identity, and Politics between the Modern and the Postmodern* という本の中から、“Television, advertising, and the construction of post-modern identities” と “Reading the Gulf: production/text/reception” という二つの記事を学生に読ませた。どのようにアメリカのメディアがブランドのイメージを上げるのか、また湾岸戦争の報道についてアメリカのメディアはある特定の方向に視聴者を導こうと方略を立てている、という論旨の論文で、これらは学生にとってかなり難しい内容だった。またドキュメンタリー映画を二つ取り上げた。イラク戦争をどのようにアメリカのメディアが取り上げたのかを分析した *Control Room* とアメリカの企業のあり方や資本主義の成り立ちを説明した *Corporation* というドキュメンタリー映画を学生たちに観てもらい、授業では英語でそれらのドキュメンタリー映画や記事について私が説明したが、国際政治や経済の知識がほとんどない学生にとって難しいドキュメンタリー映画だった。

それからアメリカのニューヨーク州を中心に東海岸に70店舗以上を持つウェグマンズ (Wegmans) という大型食料品店を訪問する予定だったので、アメリカの食文化を風刺的に描いたスーパー・サイズ・ミー (*Super Size Me*) というドキュメンタリー映画を取り上げた。このドキュメンタリーは監督自らがマクドナルドを一ヶ月間、朝、昼、晩と食べ続け、自分の健康状態がどのように変化するのかを詳細に紹介している。アメリカ社会が抱える、肥満や糖尿病、きれいな女性のイメージが若者に及ぼす影響など、きちんと科学的な根拠やインタビューに基づいて作成された、秀逸なドキュメンタリー映画である。さらに、高校や大学の授業を参観したり、ソロリティー (sorority) を訪問する予定だったので、フレデリック・ワイズマン監督の高校Ⅱ (*High School II*) や、アメリカのソロリティーの生活の一部が出てくるキューティー・ブロンド (原題は *Legally Blonde*) という映画も授業で取り上げた。高校Ⅱでは、ニューヨークのハーレムにある高校の様子をいろいろな視点から撮影し、どのようにその高校が様々な問題に対処しているのかを描写している。またキューティー・ブロンドでは、ボーイフレンドに振られた女子大学生が奮起してそのボーイフレンドが入ったハーバード・ロースクールを目指して勉強し、実際にそのロースクールに入学し、そのボーイフレンドを見返すという物語である。ソロリティーとは、同じ関心を持つ学生がキャンパス内の一つの大きな家に住み、学生生活を送る組織だが、この映画の主人公はファッションに関心があるソロリティーに属して、楽しい大学生活を送っている。このように、英語の記事やドキュメンタリーや映画を通して、学生たちにフィールドワークで実際に訪れる場所の予備知識を学んでもらうように私は心がけた。

このように授業の計画をして実際に授業をするためには、フィールドワークへ行く前

に、訪問する場所をある程度決めておく必要がある。そうしないと、事前にどのようなことを学生たちに学んでもらうのかを決めることができない。事前に訪問場所をある程度決めるためには、現地の担当者との打ち合わせが必要である。私の場合、最初に国際フィールドワークを思い立ったのは、それから二年ほど前で、カナダのトロントで行われた学会で発表したのち、レンタカーで母校のシラキユース大学まで行き、国際交流課を訪ねて、どの部署がフィールドワークのアレンジをしてくれるのか聞いた。そしてその日のうちにその部署の担当の教授と会い、私の考えを述べて、フィールドワークが実際に行えるという感触を得た。それから一年後、正式な国際フィールドワークではなく、私の担当するゼミの3年生、4年生の希望者をニューヨーク市とシラキユース大学へ連れて行き、実際にテレビ局、新聞社、高校、旅行社などを訪問し、学生の反応を確かめた。そのような下準備をして、どのような場所が学生にとって興味があるのか、どのようなことに彼らは関心があるのかを実際に知ることができ、改めてシラキユース大学の担当教授と訪問地についての意見交換をするときにとても役に立った。

シラキユース大学のTSI (Teaching System Institute) のフィル (Phil Daughty) 教授とフィルース (Firouz Rahmzadeh) さんとの話し合いでは、私が学生たちに体験してほしいことが何かを伝えた。大学の授業参観、高校訪問、新聞社とテレビ局の訪問、ウエグマンズという大型食品店への訪問、シラキユース大学のキャンパス内にあるシェラトンホテルへの訪問などである。話し合いの中で、もっとも時間を使ったのは、学生の移動手段である。ニューヨーク市は地下鉄があり、観光をするのに便利だが、シラキユース市は公共のバスが運行されているけれども、学生がいろいろなところを訪問する手段としては、本数も少なく、ルートも限られているので、移動の手段としてふさわしくない。2007年に実施したときには、宿泊したホテルが、10名ほどが乗れるバンを用意してくれて、それを使っていろいろなところへ移動することができた。2008年はそのホテルがバンを用意することができなくなっていたので、違うホテルに宿泊することとなり、移動手段として、レンタカーを使った。私とシラキユース大学の大学院生のデニスさんがそれぞれ運転をして、市内のいろいろなところを回った。私はシラキユース市で4年ほど車の運転の経験があったので、運転手となったが、自動車保険には入っていたもののやはり何かあった場合に対処に困るということで、私がレンタカーを運転したのは、その年限りとなった。2010年に実施したときには、フィル教授が何人もの知り合いの人に車を出すのを頼んで、学生たちを手分けしていろいろなところへ連れて行ってくれた。正確に何人の人たちが運転をしてくれたのか数えていないが、5～7人程度の人々が入れ替わりに車を運転して、学生たちを目的の場所へ連れて行ってくれた。

シラキユース市のようなアメリカの地方都市は、大都会と違い、ある意味素朴なアメリカの社会を体現していて、アメリカらしいアメリカを体験するにはもってこいの場所で

あるが、公共の交通手段が未発達で、移動手段をあれこれ考えなければならなかったのが、とても大変であった。

フィールドワークはシラキュース市で実施したが、全行程の中で最初にニューヨーク市に3泊した。ニューヨーク市での3泊も観光以外に意義があった。第一に合計15時間前後の飛行機の長旅のあと、いきなりフィールドワークは体力的に難しいので、アメリカの雰囲気になれるために、ニューヨーク観光を入れた。着いた当日は時差ぼけで、夕食をするくらいだったが、二日目と三日目は自由の女神とかつて移民局があったエリス島訪問、それからメトロポリタン美術館と五番街散策とショッピング、また五番街よりはカジュアルな店が多いソーホー散策とショッピングをした。またブロードウェイ・ミュージカルを毎回観劇し、2007年はカラー・パープル (*The Color Purple*)、2008年はウィキッド (*The Wicked*)、2010年はライオン・キング (*The Lion King*) を鑑賞した。特にカラー・パープルは、原作がアリス・ウォーカー (Alice Walker)、その映画化がスティーブン・スピルバーグ (Steven Spielberg) 監督のカラー・パープルで、事前に授業でそれを観ていたので、学生はミュージカルを理解できたし、ある学生は映画よりもミュージカルの方が断然よかったという感想を述べた。また2008年は、ウィキッドで、「ミュージカルは初めて観ましたが、本場のブロードウェイは本当にすごいです」とある学生は言っていたし、2010年のライオン・キングも学生には好評で、ある学生は「冒頭から鳥肌がたつくらい素晴らしい」と言った。

実際に引率してみて感じたことを、いくつか書いてみたい。第一に学生たちの英語力だが、実際に普通の早さの英語を聞き取ることは難しく、だいたい言っていることの半分ぐらいしか聞き取れなかった、というのが学生の実感だった。シラキュース市では夕方訪問先から帰ってきたら、ホテルのロビーで私その日の訪問先で聞いた話を日本語で説明した。そうすることにより、学生たちはより正確に聞いた内容を理解できるようになった。ほとんどの場所で学生たちはレコーダーを持参し録音したり、またアシスタントとして同行してくれた卒業生や大学院生は、話をビデオテープで録画してくれて、帰国後その録画を編集して、学生たちが観ることができるようにした。それらが学生たちの理解を手助けしてくれたが、フィールドワーク参加者の中には非常に英語のできる学生が数人いたが、それ以外の学生たちの英語力がもう少し高ければ、もっと得るものがあったのではないかと思う。

英語に関しては、ある学生が、今まで大学で習った英語とかなり違うという感想を漏らしたことがある。英語が母国語の先生であっても、彼らが教室で話す英語は、“Foreigner talk”と言って、文法的にわかりやすく、センテンスが短く、わかりやすい単語を使い、しゃべる速度も遅い (Richards and Rodgers, 208-209)。なぜなら話しかける対象が英語学習者で、英語の理解力がどれくらいなのかもある程度わかっているのだから、なるべくわかり

やすい英語を話そうとするからである。それに対して、フィールドワークで訪問するところで話す人たちは、日本から来た大学生ということは知っていても、どれくらい英語がわかるのかということはずわからぬので、普通にアメリカ人同士で話すような話し方をする。そこに大きな違いがあり、学生たちは理解できないことがよくあった。しかし、私はこのような経験は、英語力を向上する上においては、不可欠な経験であると思う。加工されたやさしい英語ばかり聞いていても、初級の段階ではよいが、中級から上級のレベルの英語を習得しようするならば、実際に人々が使う英語に触れることが大事である。また学生たちにとっても、これが実際に話される英語なのかという驚きが、今後の英語学習の強い動機付けとなる。

私自身の経験で言えば、大学卒業時まで日本に習った英語では、文法の知識、英文の読解力はある程度アメリカの大学院での学習に役立ったと思う。しかし、私の聞き取る力、語彙力、話す力は低く、アメリカの大学院のはじめの1、2年では苦勞した。とくにアメリカの大学院での英文学の授業では、毎週一冊の小説(300ページから500ページ)をあらかじめ読んでおいて、授業ではその小説の内容についての議論がほとんどだったので、日本の大学での英文学の授業との差に愕然とした。私が通っていた日本の大学では、1学期に一冊の小説をも読み終わることがなく、一回の授業で2ページほどを日本語に訳して教授が解説するというつまらない授業が多かったからである。このような私の経験もあり、学生には本場での英語の臨場感のようなものを体験してもらい、さらなる英語学習へとつないでほしいという願いがある。

第二にアメリカでは、人の話を聞いた後に、質問をするということが、よいとされる。それは質問することにより、わたしはあなたの話をよく聞いていましたというシグナルを送ることになる。日本ではわからないから質問するという考え方で、他の人がいるところで質問することは、わたしは話が理解できませんでした、というように解釈され、質問することが羞恥心と結びつく。それに対して、アメリカでは、あなたの話をよく聞いていたけれども、説明不足のところがあるのでもっと説明してほしい、と質問することが解釈される。ほとんど例外なく、学生たちに話をしてくれたアメリカ人は、話し終わったあと質問がないかどうか聞いてきたし、質問が出れば嬉々としてその質問に対しての答えや関連する事柄を話してくれた。そのような質問に対する文化的な違いをきちんと学生に理解してもらおうのはなかなか難しかった。質問が出ないと話したアメリカ人はがっかりした表情をして、私は個人的に申し訳ない気がした。

第三に、学生たちがどのような異文化体験をしたのかを書いてみたいと思う。まず、第一回目のフィールドワークの時だが、ニューヨーク市で学生たちが買い物をしたとき、アメリカの店員たちの接客の態度がぶっきらぼうだったのに、学生たちはとてもショックを受けた。日本のようにお客に丁寧に接するというサービスをアメリカでも期待していた学

生たちは、想像とは違ったアメリカ人の態度に驚いたようである。それから、ニューヨーク市からシラキュース市へ移動するときに、ラガーディア空港を使った。そのときにある学生が手荷物の中に液体の化粧水を持ち込んでいて、その量が少し許容される基準よりも多かったのが、空港の検査官に没収と言われた。最初、その学生は空港の検査官が言っていることが理解できず、私が検査官の言っていることを通訳したが、学生はその化粧水は5000円ほどしたので、どうしても捨てたくないと言った。どうしても没収されたくないというのなら、もう一度検査場を出て、空港のカウンターでその液体を預ける手続きをする必要があると告げられた。しかしながら、もう一度カウンターで手続きをすると、確実に乗る予定の飛行機に乗れなくなるので、その学生は泣きながらその化粧水の没収に同意した。またその年ラガーディア空港では、ボディー・チェックが厳しくて、何人かの学生は真冬にもかかわらず、下着とその上に着ていた服だけの状態で、厳しいボディー・チェックを受けて、ショックを受けた。

2008年に実施した2回目のフィールドワークで印象に残っているのは、ファウラー高校訪問である。高校に着いたら、まず入り口のところで、IDチェックがあり、私たちはパスポートを見せて、構内に入る許可証を受け取り、胸につけた。廊下には警備員がいて、授業を無断で抜け出す学生がいないかどうか監視していた。また昼食時に私たちは高校のカフェテリアで食べたが、隣のテーブルではラップを歌っている高校生がいたり、カフェテリアに拳銃を持った警備員がいたりして、日本の高校では考えられないような緊張感がカフェテリアにみなぎっていた。トリシア・ローズ (Tricia Rose) によれば、ラップでは演奏者のみならず聞く若者も犯罪と関係のある人というレッテルを貼られるという記事があるが、それを思い出した。高校のカフェテリアに拳銃を持った警備員を配置する学校側は生徒が罪を犯す可能性があるかと確信しているのだろうか。

2010年に実施したフィールドワークで一番印象に残っているのは、私たちが観戦したシラキュース大学対ピラノバ大学のバスケットボールの試合である。その時点でシラキュース大学が全米ランキング2位、ピラノバ大学が3位という好カードで、34616名の観客がキャンパス内にあるキャリア・ドームに詰めかけ、その当時、もっとも多くの観客が観戦した大学のバスケットボールの試合となった。試合当日、私たちが宿泊していたシェラトンホテルでは、スクールカラーのオレンジのTシャツを着た人たちでごった返していたが、相手校のピラノバ大学の選手も同じホテルに宿泊していた。ロビーにピラノバの選手が現れると、至る所でプーイングの嵐が渦巻いた。大学のキャンパス内にあるキャリア・ドームは5万人収容のドームで、フットボール、バスケットボール、ラクロスなどの試合が行われる。バスケットボールの試合はコートが西側に設置され、客席もフィールドの中央あたりにバスケットボールのコートを囲むように設置されるが、2階席以上はドームの東側以外すべてが使用される。私たちは3階席からバスケットボールを観戦したが、試

合前にピラノバ大学のTシャツを着た人が一人客席の中に現れ自分の席に座ろうとしたときに、周りのオレンジのTシャツを着た学生たちが、思いっきりブーイングしているのには、感心した。自己主張の強いアメリカならではの光景である。

またシラキュース大学の授業をいくつか参観したが、そのとき印象に残った授業を書きたい。エド・ラッセル (Ed Russell) 教授の広告の授業だが、私たちが参観したのは学生のプレゼンテーションだった。学生は4人1組となって指定された商品の広告の企画書を会社に売り込むという設定で、教授を売り込む相手の会社の役員と想定してプレゼンテーションを行った。学生たちはメモしたカードだけを見ながら、実際に会社に企画書を持ち込んで説明するように真剣に熱意を持ってその企画書を売り込んだ。

リチャード・ライト (Richard Wright) 教授の、ラジオ・テレビの放送実習という授業では、各学生がラジオのDJとなり、3分間のDJを行うというものである。私たちが参観した授業では、アメリカの学生が愛知大学の学生に対して質問して、3分間の番組を作り上げるということを行った。ときばきと答えた愛知大学の学生もいたが、その一方でアメリカの学生の質問がわからずに言いよどんでしまう学生もいたが、そのようなときでもアメリカの学生はうまく場をつなぎ、きちんと3分間で番組を完結させた。このような二つの授業でわかるように、アメリカの大学では、テキストを使った理論のみならず、実社会に出て役に立つことも教えている。愛知大学の学生が、「これらアメリカの学生は授業で実践的なことを学んでいるが、実際にシラキュース大学を卒業したら、DJになるのか」という質問をしたが、シラキュース大学のコミュニケーション学部は全米でも評価が非常に高く、多くの学生は放送局やテレビ局に就職するので、実際の授業内容がすぐに役立つ。

それから、このフィールドワークではただ単にアメリカのことについて学ぶばかりでなく、アメリカの人たちに日本のことも知ってもらおうということで、訪問したアメリカの大学や高校、教会などで、日本の文化について英語で学生たちに紹介してもらった。たとえば、2010年のフィールドワークに参加した学生たちは、アメリカの高校で、日本で人気のあるAKB48についての紹介や、日本の女子大生のファッションや日本の伝統の文化の一つである折り紙の実演などをした。自分たちが興味があり、なおかつアメリカ人にも興味を持って聞いてもらえそうなトピックを選び、国際フィールドワークの授業の中で、それらのプレゼンテーションを英語で練習した。

アメリカから帰ってきた後の国際フィールドワーク (アメリカ) II の授業についてだが、学生たちは現地でもメモしてきたものをもとに英語でフィールドノートを作成した。3回のフィールドワークとも、教育関係を分析する学生たちとビジネス関係を分析する学生たちに班を分け、それぞれ訪問した場所で見聞したことを、各学生が3ページほどの英語のフィールドノートを2セットほど私に書いて提出した。学生たちには、なるべく詳細にわたって経験したことを記述するように指導した。また、出会った人がどんな人だったの

かその記述、実際にその人たちが言ったことの再現、その人たちと出会った空間や場所の記述、どのようなことを実際に行ったのかという活動の記録がフィールドノートでは大切な項目なので、それらをきちんと書くように指導した (Bogdan & Biklen, 121)。この作業は英作文の力をつけるのにとても効果があった。自分がじかに体験したことを、もう一度メモを通して思い出して、英語で記述するということは、学生にとって大変な作業ではあるが、ある意味書きやすく、分析しやすいトピックである。自分がアメリカで体験したことを記述することにより、異文化に対する理解が深まるし、それと同時に英語を書く力もつく。また、ただ単に体験を英語で記述するだけではなく、観察者としてのコメントとして、その体験したことについてどのように自分が思うのかも書くように指導した。これは自分が体験したことの背後にはどのような文化的な価値観や考え方があるのかを認識するのに役に立つ (Bogdan & Biklen, 122-23)。このような観察者としてのコメントを随時書いておけば、フィールドノートを分析する時にとても参考になる。

最終的に学生たちは自分のフィールドノートをもとに、8枚の英語の論文を書いた。私のほうで何度か添削をした後、学生たちの論文はフィールドワークの日程、授業のシラバス、巻末に2学期間を通しての感想を載せて、一つの冊子として製本した。約300部印刷し、国際コミュニケーション学部の教員やオープンキャンパスに来た高校生に配布し、フィールドワークでの成果を公表した。

実際に3回実施してみて、学生にとって観光旅行や留学では体験できないような貴重な体験を得られたことが、フィールドワークのよいところだと思う。ある学生は「レポートやプレゼンが多くて、とても大変でした。でも、実際にフィールドワークでアメリカへ行って、様々な経験ができて、とてもよかったです。旅行や留学ではできないことばかりの2週間は、一生の思い出です。これからの人生にこの経験を生かしていきたいと思います」と書いてくれた。またある学生は「学校訪問で、自分の意見をしっかりと持ち、積極的に授業に参加しようとする生徒の姿勢にとっても刺激を受けました。日本との違いだけでなく、学校ごとの雰囲気の違いも実感することができ、地域ごとの所得格差など、アメリカ社会の実情を見てくることができました。またどんどんチャレンジすることの大切さや、それができる環境が整っている社会の背景を知ることができ、アメリカ文化を肌で感じることもできたと思います」と書いてくれた。このようにフィールドワークでは学生がとても貴重な体験をし、語学力が短期間で向上するばかりでなく、それまで持っていた自分の価値観をもう一度見直す機会ともなった。教員にとってはとても負担が多く、それ以前に実施されたアジア諸国での国際フィールドワークを参考にしたが、手探りの状態のことも多く、旅行会社との折衝、シラキユース大学の担当者との打ち合わせや連絡、学生への説明会、冊子の校正と編集をはじめ、実際のフィールドワークでは朝から夜まで学生の引率など、フィールドワーク実施期間中のみならず、準備と事後の処理だけでもかなりの

仕事量をこなさなければならず、とても大変であった。しかしながら、学生たちから参加してとてもよかったという感想が聞けたことが、何よりの成果だったと思う。

参考文献

- Bogdan, Robert C. and Biklen, Sari Knopp. 2006. *Qualitative Research for Education*, New York: Pearson Education Inc.
- Kellner, Douglas. 1995. *Cultural Studies, Identity, and Politics between the Modern and the Postmodern*, New York: Rutledge.
- Richards, Jack C. and Rodgers, Theodore S. 2001. *Approaches and Methods in Language Teaching*, New York : Cambridge University Press.
- Rose, Tricia. 1994. *Black Noise: Rap Music and Black Culture in Contemporary America*, Connecticut: Wesleyan University Press.